

芥川龍之介文芸におけるキリスト教受容の問題

細 川 正 義

一

芥川龍之介が昭和二（一九二七）年七月二十四日未明にペロナールとジャールを合わせた睡眠薬を多量に飲んで自殺をしたが、その最後まで聖書を読みながら死出の旅立ちをしたことは夙に知られている。彼の最後の作品は『西方の人』正統編であるが、『西方の人』を脱稿したのが七月七日、その後すぐに『続西方の人』の執筆を始め、その『続西方の人』を書き上げたのが七月二十三日の深夜で、その数時間後に自殺を執行している。この『西方の人』正統はかなり聖書の細部にわたるまで問題にしており、彼がいかに懸命に聖書と格闘したのが推測できる。そのなかで『西方の人』は雑誌「改造」に掲載するために時間に追われながら執筆しているが、『続西方の人』はその『西方の人』執筆の心熱に促されての部分もあって、まさに死を目前に自覚しながら必死で聖書に問いかけながら執筆したのであることが、『続西方の人』の次の一文からうかがえる。

わたしはわたしのクリストを描き、雑誌の締め切日の迫つた為にペンを抛たなければならなかつた。今は多少の閑のある為にもう一度わたしのクリストを描き加へたいと思つてゐる。（中略）わたしは四福音書の中にまざまざとわたしに呼びかけてゐるクリストの姿を感じてゐる。わたしのクリストを描き加へるのもわたし自身にはや

めることは出来ない。

「1 再びこの人を見よ」⁽¹⁾
「まぎまぎとわたしに呼びかけてゐるキリスト」「わたしのキリストを描き加へるのもわたし自身にはやめることは出来ない」と書くこの言葉にはいかに芥川がキリストに接近し、「わたしのキリスト」に向つて必死に問いかけようとしているかがうかがえるところである。その求めが『続西方の人』の最後の一文、即ち、芥川のまさに生きて残した最後となった次の言葉に深く立ち止まらざるを得ないのである。

我々はエマヲの旅びとたちのやうに我々の心を燃え上らせるキリストを求めずにはゐられないのであらう。

「22 貧しい人たちに」⁽²⁾

この一文は、聖書の「ルカによる福音書」の、エマオを旅する弟子たちが復活のイエスに出あつてその時に「私たちの心は燃え上つていた」と回想する箇所を踏まえてのことばであるが、絶筆となつたこの一文には、死を直前にした芥川が、最後までキリストの救いを切実に求めていた姿が描かれていると言えよう。

芥川が自殺を決意していたことはかなり早い時期であつたが、少なくとも彼が遺書として描いた『或旧友へ送る手記』（一九二七（昭和二）年七月、東京朝日新聞）には

僕はこの二年ばかりの間は死ぬことばかり考へつづけた。⁽³⁾

と記していることと、友人であつた小穴隆一が後年『二つの絵 芥川龍之介の回想』のなかで、

三月の二十七日から四月十八日までの、二十三日間といふものは、七度も芥川に会つてゐたが、四月十五日をのぞくとそれは悉く僕一身の事と言つてよろしい。（一身上のことといふともつともらしいが、僕はその頃一寸道行のやうなことをした。）

四月十五日に芥川は七年越しのくるしさの告白をする、さうして自決を選ぶほかに道はないことを言ひだしてゐる。

四月十八日に蒔清（故、古原草遠藤清兵衛）に渡してくれと頼まれた礼の品は、希臘の瓶の繕ひの札と、その前のこともあつての札ではあるが、僕の思ふには、これが交友に遺品として贈つた最初のものかと考へる。

品物は、鈴木春信の秘戯冊であつた。

芥川は自決の意を漏らすその前の二ヶ月ほどの間、「僕はこの歳になつていま、人は如何に生くべきかを考へて迷つてゐる。トラピストにはいらうとかとも考へてゐる。」といふやうなことを口にしてゐた。（彼は妻子と床を並べてゐて死んでゐた。さうして彼の枕もとには古びた聖書があつた。）

（四月十五日とは、大正十五（一九二六）年、自殺の前年（細川）

（その前後）⁽⁴⁾

と回想していることから、芥川が晩年は死を真剣に考え、一年以上前に「自決」の意思を固めていたことが推測できる。そうした死と切実に向き合っているこの頃に、例えば『菌車』『五 赤光』で「僕」と神について問答する屋根裏の老人として描かれる室賀文武のもとにも頻繁に通い聖書のことを真剣に語り合っている。『菌車』には次のように記している。

「如何ですか、この頃は？」

「不相変神経ばかり苛々してね」

「それは薬では駄目ですよ。信者になる気はありませんか？」

「若し僕でもなれるものなら……」

「何もむづかしいことはないのです。唯神を信じ、神の子の基督を信じ、基督の行つた奇蹟を信じさへすれば……」

「悪魔を信じることはできませんがね。……」

「ではなぜ神を信じないのです？ 若し影を信じるならば、光も信じずにはゐられないでせう？」

「しかし光のない暗もあるでせう」

「光のない暗とは？」

僕は黙るよりほかはなかつた。彼も亦僕のやうに暗の中を歩いてゐた。が、暗のある以上は光もあると信じてゐた。僕等の論理の異なるのは唯かう云ふ一点だけだつた。しかしそれは少くとも僕には越えられない溝に違ひなかつた。………

〔五 赤光〕⁽⁵⁾

神経ばかり苛々していると語る僕に「信者になる気はありませんか」かと問う老人、しかし悪魔は信じることができても神は信じられないと訴える「僕」が、神を信じることが無理であることを自覚しつつもそれでも切実に神を仰望していることも推測できる。そのような『鹵車』の「僕」はまた、『西方の人』を書く芥川の心情に重なることも推測できよう。そのことが次の一文を書かせているともいえる。

ゲッセマネの橄欖はゴルゴダの十字架よりも悲壮である。キリストは死力を揮ひながら、そこに彼自身とも、——彼自身の中の精霊とも戦はうとした。ゴルゴダの十字架は彼の上に次第に影を落さうとしてゐる。(中略)

キリストの祈りは今日でも我々に迫る力を持つてゐる。——

(28 イエルサレム)⁽⁶⁾

特に「キリストの祈りは今日でも我々に迫る力を持つてゐる。」の箇所には、人生の終焉を自覚し、恐怖の中で「神経ばかり苛々している」状況の中で「聖書」に懸命に問いかけよりどころを求めようとしている心情が読み取れるところであろう。しかし、結局芥川はエマオの旅人たちのように「心を燃え上らせるキリスト」に出会う事が出来ずに死を選ばざるを得なかつた。そうした芥川とキリスト教との関係を、佐古純一郎は、

四つの福音書をとおしてのキリストをみつめた芥川の眼は近代的知性の眼であつた。私たちは、信仰の眼によつて認識されないキリストの認識が、いかに、まとはずれになるものかをまざまざと芥川のキリスト論によつて教えられるであらう。

ととらえている⁽⁷⁾。確かに、芥川は最後まで聖書を読み続け、キリストに近づいて行つたけれども信仰を持つには至らなかった。佐古の評価はそうした芥川とキリスト教におけるどうしても越えて行けなかった限界を剔抉していて、これまでも長らくこうした佐古の評価の視点を超えないところで芥川とキリスト教のかかわりは論じられてきたことも認めなければいけない。

しかし、本論考で強調したいのは、芥川は確かに信仰こそ持つには至らなかったが、「神」をはっきりと認識し、宗教に最も近いところまで接近していたという事である。そのことを明確に指摘した立場として佐藤泰正氏が『菌車』の「二 復讐」の次の箇所を取り上げて指摘している。

廊下はきょうも不変牢獄のように憂鬱だった。僕は頭を垂れたまま、階段を上ったり下りたりしているうちにいつかコック部屋へはいっていった。コック部屋は存外明るかった。が、片側に並んだ竈は幾つも炎を動かしていた。僕はそこを通りぬけながら、白い帽をかぶったコックたちの冷やかに僕を見ているのを感じた。同時に又僕の堕ちた地獄を感じた。「神よ、我を罰し給え。怒り給うこと勿れ。恐らくは我滅びん」——こう云う祈祷もこの瞬間にはおのずから僕の唇にのぼらない訣には行かなかった。(傍線…細川) (『菌車』二 復讐) に対して、佐藤氏はこのようにとらえている。

恐らくは日本の近代文学の作中に、このように痛切な深い祈りが記された箇所は殆どあるまい。悪魔は信じられても神は信じられぬという主人公をして、なおかつこのような祈りを告白せしめていることは注目すべきであろう。⁽⁸⁾

『菌車』「二 復讐」の「神よ、我を罰し給え。怒り給うこと勿れ。恐らくは我滅びん」に対して佐藤氏の「このように痛切な深い祈りが記された箇所は殆どあるまい」と断定した論は、芥川の晩年の神仰望を最も肯定的にとらえた論であろう。更に『続西方の人』で描いた「エマヲの旅びとたちのやうに」「キリストを求め」ようとする心情を重ね

て考えるならば、佐藤氏の論は、芥川の晩年のキリストとのかかわりを最もリアルに指摘している視点としてとらえることができる。

このように最晩年の『菌車』『西方の人』正統からうかがえるように、死の恐怖に脅かされながらも、一方で懸命に聖書を読み神を求めようとしていた芥川とキリスト教の関係を確認したうえで、改めて芥川にとってキリスト教がどのようににかかわっていたであろうかという〈受容〉の有り方を問う視点で考察を進めていきたい。

一一

かつて森有正が次のように述べている。

キリスト教は文学の材料としてその中に消化吸収せられるに甘んずるものではなく、従って単に文学的内容であるばかりでなく、文学的創造活動の根源にあつてそれに生命を与え、その方向を決定するものであることが明らかになるであろう。⁽⁹⁾

即ち、キリスト教はその出会いの過程において、信仰とは直接結びつきがなくても、どのような形であれ、そこで一人出会いという事実があれば、その人の「根源」に影響を与え、人生の方向を決定していくのであると指摘している。

従来芥川のキリスト教との出会いは『西方の人』冒頭の

わたしは彼是十年ばかり前に芸術的にキリスト教を——殊にカトリック教を愛してゐた。(略)それから又何年か前にはキリスト教の為に殉じたキリスト教徒たちに或興味を感じてゐた。殉教者の心理はわたしにはあらゆる狂信者の心理のやうに病的な興味を与へたのである。わたしはやつとこの頃になつて四人の伝記作者のわたし

たちに伝へたキリストと云ふ人を愛し出した。⁽¹⁰⁾

を引き合いにして、ここで芥川が言っている「彼は十年ばかり前」にあたる一九一六（大正五）年以前にあつては、彼のキリスト教への関心は、芸術的ではあつてもけつして宗教的関心ではなかったという見方が多くなされてきた。しかし、森有正の視点でいうなら、青年期の出会いが仮に宗教的ではなくとも、たとえそこでいかなる形であつたとしても、聖書を読み、神のことを考え、神に問いかけたという事実こそ、森が「文学的創造活動の根源にあつてそれに生命を与え、その方向を決定するもの」ととらえているように、芥川に於いてもその命根において出会いの痕跡を持續し、それが特に晩年になつて死とより切迫した形で対峙するようになって、自らの狂気とも切実に向き合うようになってから、懸命にイエスを求め、そうした現実との対極としての神への仰望として意識されるようになったといえるのではないか。

芥川は『西方の人』では、「十年ばかり前」、即ち一九一六〜七年ごろを指しているが、芥川と聖書の触れ合いから推測するならば、実はもっと早くから聖書に出会い、かなり読み込んでいたことも推測できるのである。森の論に従うなら、芥川の文芸の出発と展開を考える上で、この早い段階での聖書との出会いこそ、その方向を定める大変重要な要素となつたであろうことが推測されるが、本稿ではその立場に於いて、まずそうした、芥川の早い段階での聖書、キリスト教との触れ合いから検証していきたい。

芥川作品で早くに聖書とのかかわりが出て来るものとしては、芥川十八歳の明治四三（一九一〇）年頃執筆されたと推測されている『老狂人』があげられる⁽¹¹⁾。作品は、「私」が子供の頃の体験を思い出して語る体裁になっている。語り手である「私」のその頃の友人の幸さんが、「秀馬鹿の泣いているのを見たかい」と聞いた。秀馬鹿と云うのは幸さんの家と垣根を一つ隔てた豆腐屋に隠居している老狂人で、幸さんに誘われるまま二人は興味本位で垣根にびたりと体をつけて豆腐屋の家の中を透かし見た。しばらく待っていると縁側の柱によりかかつて両膝を抱いた老人

が語り出すのが聞こえた。

「天にまします……さんたまりあ…… つみ人を……」

その場面での老人の声は「深い感激にみちた 祈祷の言」で、「低く かなしく 刺すやうに 私たちの耳にひびきました」と回想している。そして更に

その声が とぎれたと思ふと やるせない慟哭の声が 更に深強く 更にかなしく 限ない多く人々の胸を通じて ひびいてゐる生の孤独を祈へる声が この人々にかはつて この老人の口からもれたやうな——私にはその興奮した息づかひまできこえたやうに思はれました。あらゆる苦しみをわすれた あらゆる樂しみをわすれた 唯 奥ぶかい まことの「我」から起こってくる 涙がとめどなくあふれるのでせう 老狂人は いくども 慟哭の声をつづけてゐました

と書き、老人のその声を聞いて幸さんが「忍び笑」をし、私も釣り込まれて笑い、二人して「可笑しい奴だね」と呟いたと回想している。この老人の祈りに対して佐藤泰正氏が

この習作一篇に、彼の全生涯をつらぬく——無垢なる素型を見ると言いたい。

と指摘しているが、佐藤氏の指摘のように、この場面を描いた十八歳前後の芥川が、キリスト教の信仰というものかなりの理解を持っていたことが想像できるのである。更に作品に触れて言えば、『老狂人』は「私」が子供時代を回想した形で描いた作品であるが、その最後のところで

「可笑しい奴だね」と笑つた私は 今では その「可笑しい奴」に 深い尊敬を感じずにはゐられません あの祈祷と慟哭 信徒を磔刑に処したと云ふ 封建時代の教制——私は今だに あの時老狂人に加へて嘲笑を 心から恥ぢてゐます

と書きとめているところに、この作品を執筆した頃の芥川が、キリスト教を信仰する者に対して、それを認めそのよ

うな信仰者に対して憧憬する心情を持っていることがうかがえることにも注目しておきたいところである。

『西方の人』で「わたしは彼は十年ばかり前に芸術的にクリスト教を——殊にカトリック教を愛してゐた」と書いたように、十代の若き日にあつては、彼自身がクリスト教を信仰することに対して接近しているというところまでは言えなかったにしても、ここで懸命に祈禱する老狂人に対して、「深い尊敬を感じずにはゐられません」と書き留めている所に、森有正の言葉を借りるなら、若き日に宗教に対して、「文学的創造活動の根源にあつてそれに生命を与え、その方向を決定する」という有りようにおいて、何らかの体験をしていることを認めることが必要であろうと考える。

そのことが更にうかがえるものとして、彼の若き日の聖書所持の事が考えられる。このことについては拙稿ですでに指摘したので一部を引用しておく。

芥川がクリスト教を何時の時点から具体的に意識し始めたかは明かに出来ないが、聖書との出会いはずで多くの論者によつて明かにされている。確認されているのは、一高時代に井川恭より贈られた『THE NEW TESTAMENT』（一九〇二（明治三五）年）と、室賀文武から贈られた改訳『新約聖書』（一九一七（大正六）年改訳）、そして芥川の死出の枕元に開かれたまま残された『HOLY BIBLE 旧新約聖書』（一九一四（大正三）年一月初版）である。この『HOLY BIBLE 旧新約聖書』にはかなりの赤線、書き込みがなされていて現在日本近代文学館に保存されているが、芥川が所持していたものは一九一六（大正五）年に新たに二〇〇〇部印刷されたものの一冊であることが記載されていて、この聖書を手したのは大正五年以降である事がうかがえる。¹²

関口安義氏は、この井川恭から英語聖書が送られた以前に「芥川はこのほかに〈元訳聖書〉によつて成る先に記した『旧約全書』や『新約全書』をも持っていた」と指摘している¹³。即ち、一高入学以前から日本語版の聖書を持つて

いて、早くから聖書を読んでいたことが推測できるのである。

習作期のキリスト教や聖書に関する作品としては先の『老狂人』以降、大正三（一九一四）年の「マグダレナのマリア」、「PIETA」、大正四（一九一五）年の「ナザレの耶穌」「暁」などがあるが、「暁」や「PIETA」を一例としてみるならば、

B どうだい、今度は靴で顔をふみつけた奴があるぜ。

A 又一つなぐつたな。あの皮の靴では痛からう。

B メめた、メめた、そこを思切つて踏みつけろ。そら、鼻血が出て来た。

A さうだ、さうだ。もつと力を入れてなぐるがいい。

B だが、あんな目にあつても、あの男はだまつてゐるぜ。

A うん

暫 沈黙

B 妙な男だ。己は今まであんな奴にあつた事はない。

A うん、己もあつた事はない。

「暁」⁽¹⁴⁾

一 しかし、ゴルゴダへひかれて行くラビの姿ほど、いたましいものはなかった。

二 石を投げる者がある。唾をはきかける者がある。己は腹が立つて仕方がなかったが、ラビの顔を見ると、唯、悲しくなつて、ゴルゴダへ来る迄は、どこをどう歩いたか 知らなかった。

三 ラビは、己れの顔を見て 笑はれた。

一 己は、ラビの顔の創が、今でも眼についてゐる。あれは棘の冠をかぶらせられた時の創にちがひない。

二 あの十字架を背負つてゐたシモンが 石につまづくと、ラビはいつも手をとつて、たすけておやりになつた。

三 己は一生、あの時のラビの笑顔を忘れない。

二 さうして、己とマリアが泣いてゐるのを見て、「己の前に泣くな。お前とお前の子の為に泣け。」と、お云ひになつた。

一 ラビは、手にも足にも、痣が出来てゐた。

四 (きはめて低く) ラビ、ラビ。(傍線…細川)

「PIETA」⁽¹⁵⁾

などの箇所にかがえるように、芥川の描くイエス像としては、十字架にかかる場面で、民衆から見放され弟子たちからも見放されてゴルゴダの丘を登って行つたイエスが、それでもこの世でのいのちの尽きる最後まで「笑顔」と優しさを失わずに十字架にかかつていった姿として想像して描いている所に特色を見ることができるのである。「PIETA」の最後のところで使徒の一人が「ラビ、ラビ」と小声で繰り返す箇所は、まさに芥川の肉声が記されたような身近な声として読むこともできるところでもあらう。

二

若き日にかなり強く、群衆から見放された孤高のイエス像に興味を示して描いている背景としては、彼の青年時代の実生活での環境が影響を与えているという事もできる。

芥川は生後七カ月目に生母が発狂し、生母の兄芥川道章夫婦に育てられた。実母が狂人となっていることは『点鬼簿』の中に

僕の母は狂人だった。僕は一度も僕の母に母らしい親しみを感じたことはない。僕の母は髪を櫛巻きにし、いつも芝の実家にたった一人坐りながら、長煙管ですばすば煙草を吸っている。(略) 如何にももの静かな狂人だった。(略) 僕の母の死んだのは僕の十一の秋である。それは病の為よりも衰弱の為に死んだのであらう。(略) 僕の母は三日目の晩に殆ど苦しまずに 死んで行った。死ぬ前には正気に返ったと見え、僕等の顔を眺めてはとめ度なしにぼろぼろ涙を落した。¹⁶⁾

と書かれていることから、実母の亡くなる時よりも早くから知らされていたことが推測できる。少年芥川が度々新原家を訪ねては二階の母を覗きに行っていた様子がうかがえる記事であるが、東郷克美氏は

感傷を含んだ孤独や寂寞の意識は、青年期に通有のものとはいえず、芥川の余りにも強い「さびしさ」の表白は何に由来するものであらうか。簡単に結論を引き出せる事柄ではないが、存在の底深い部分から湧き出て来るようなこの「寂寞」の淵源を辿って行くとき、いいふるされたことながら、芥川の場合やはり「狂人の母」を持つたという理不尽な宿命の問題に、まず行き当たらざるを得ない。それにしても、芥川はいつ、芝の新原家の二階にいる「如何にももの静かな狂人」(『点鬼簿』)が実の母だと知らされたのであらうか。生後七か月で母が発狂したために芥川家に引き取られた龍之介は、養父母や伯母によっておそらくは実子同様に、いやしばしばそれ以上に大事に育てられて、少なくともある時期までは養父母を実の親と思い込んでいたにちがいない。(略) 芝の実の父母のことについては早くから、少なくとも明治三十五年十一歳以前から、(おそらくは龍之介に強く執着していた実父敏三によって)はつきりと知らされていたものと思われる。十歳になるかならないかで、それまで実の父母と信じていたのが、養父母であり、廃人同様の「狂人」が実の母だと知らされた子供が心にどんな傷を受けるものか想像するだに残酷だ。(略) 芥川が幼い頃から芝の実家にしばしば泊まりに行っていることは、日記や書簡などで知れる。(略) 芥川は伯母への愛はしばしば語るが、彼の書き残したものに養母の影は薄い。つま

り、芥川家の方にも、幼児に必要な何かが欠けている。(略) いわば、芥川は生まれ落ちる前から、どこに帰属していいかわからない不安定な状態の中に投げ出されていたのだといつてよい。こうした環境が芥川の中に早くから孤独と寂寥を生じさせて行ったことは自然であつたろうし、それだけに一層「さびしさ」を慰めるべき、あてどない「愛」への渇きが彼の痼疾となつたことも想像しやすいことである。⁴⁷⁾

と述べているが、彼の推測するように、生母が発狂したために展開した生い立ち、その後の芥川を寂しさや弱さに対して大変敏感な少年として育てていくことになつたと考える事が出来る。そのことが端的に表れている一つとして、明治四十二(一九〇九)年十月の中学校の修学旅行で足尾銅山を見学した体験を書いた「温き心」の次のような記事がある。

私はこの汚れた小供の顔と旨の御婆さんを見ると 急にピーター・クロポトキンの「青年よ 温き心を以て現実を見よ」と云ふ言が思ひ出された。何故思ひ出されたかはしらない。唯 漂浪の晩年をロンドンの孤客となつて送つてゐる 迫害と圧迫とを絶えず蒙つたあのクロポトキンが温き心を以てせよと教へる心持を思ふと我知らず胸が迫つて来た さうだ温き心を以てするのは私たちの務めだ 私たちは飽く迄態度をヒューマナイズして人生を見なければならぬ それが私たちの努力である 真を描くといふ それも結構だ 然し、「形ばかりの世界」を破つて其中の真を捕へようとする時にも必ず私たちは温き心を以てしなければならない「形ばかりの世界」に囚はれた人々はこのあばら家に楽しさうに遊んでゐる小児のやうな それでなければ盲目の顔を私たちの方にくけて私たちを見やうとする御婆さんのやうな人ばかりではあるまいか

この「形ばかりの世界」を破るのに あく迄も温き心を以てするのは当然私たちのつとめである。文壇の人々が排技巧と云ひ無結構と云ふ 唯真を描くと云ふ 冷な眼ですべてを描た所謂公平無私に幾何の価値があるかは私の久しい前からの疑問である。単に著者の個性が明に印象せられたと云ふに止りはしないだらうか

私は年長の人と語る毎にその人のなつかしい世なれた風に少なからず酔はされる 文芸の上ばかりでなく温き心を以てすべてを見るのはやがて人格の上の試練であらう 世なれた人の態度は正しくは是だ 私は世なれた人のやさしさを慕ふ⁽¹⁸⁾

「形ばかりの世界」とは日露戦争後の、国民全体に対する統制と軍国主義化を急ぐ日本の方向性と、庶民の貧困が顧みられない政策が先行する状況に対する青年芥川の批判の声とも見る事が出来る。そうした時代状況に対して「形ばかりの世界」を破るのに、あく迄も温き心を以てするのは当然私たちのつとめである」と訴える言葉には、芥川の人間としての優しさが感じられる。一方、「温き心」と前後した時期に友人山本喜誉司に宛てた書簡（大正四（一九一五）四月二三日）では、

相不変さびしくくらしてゐます⁽¹⁹⁾

とあるようにこの頃しきりに寂しさを訴えている。実の両親から離れて、孤独で寂しかった生い立ちから、寂しい心情を抱いた青年期にかけてを体験する芥川、それゆえに足尾銅山で「汚れた小供の顔と盲の御婆さん」に心をとめて、こうした貧しい人へ「温き心」を向けることの必要性を訴える優しさが発揮されているというようにも考えられる。そしてこうした青春時代の芥川が聖書に惹かれて行ったのはごく自然であつたとも考えられる。先に例示した『老狂人』はまさにそうした寂しさと、人間への共感、聖書への関心といったことが一つになって表わされている作品だという事が出来る。

そしてそうした人生の寂しさへの実感に拍車をかけることになったのが大正四（一九二五）年の失恋体験である。この年の二月ごろ、求婚まで考えた吉田弥生との恋が、芥川家の反対で断念せざるを得なくなった後、彼は井川（恒藤）恭宛てに次のような手紙を書いている。

イゴイズムをはなれた愛があるかどうか イゴイズムのある愛には人と人との間の障壁をわたる事は出来ない

(略) イゴイズムのない愛がないとすれば 人の一生ほど苦しいものはない。

周囲は醜い 自己も醜い そしてそれを目のあたりに見て生きているのは苦しい しかも人はそのまゝに生きる事を強ひられる 一切を神の仕業とすれば神の仕業は悪むべき嘲弄だ。

僕はイゴイズムをはなれた愛の存在を疑ふ(僕自身にも)僕は時々やりきれないと思ふ事がある 何故こんなにして迄も生存をつゞける必要があるのだらうと思ふ事がある そして最後に神に対する復讐は自己の生存を失ふ事だと思ふ事がある⁽²⁰⁾

「イゴイズムをはなれた愛」即ち純粋な愛の存在を疑う体験とは、養父母、叔母が芥川家の格式や新原敏三に対する個人的感情によつて芥川の結婚を反対する理不尽さを指している。そしてここにも「一切を神の仕業とすれば、神の仕業は悪むべき嘲弄だ」と書いているように、聖書とキリスト教を意識していることが窺える。この頃に藤岡蔵六に宛てた書簡の中に

わが心ますらをさびね一すぢにいきの命の路をたどりね

かばかりに苦しきものと今か知る「涙の谷」をふみまどふこと

わが心や、なごみたるのちにして詩編をよむは涙ぐましも

と歌った短歌が記されている⁽²¹⁾。この短歌に対し関口安義氏は

一高時代の教養主義的知的摂取とは異なり、自らの悩み、苦しみを託しての「聖書」との格闘がここにはじまる。「詩編」は龍之介の心に響くものがあつた。「涙の谷」の箇所は神への嘆願の詩であり、龍之介は自らの願いを重ねて読んだのであろう。自分の祈りを聞いて欲しい、耳を傾けて欲しい、省みて欲しい、苦悩を鎮めて欲しいとの「詩編」の詩人の願いは、龍之介自らのものでもあつた。彼は「詩編」に己の悲しみや苦しみを重ね、カタルシスを図つたかのようだ。

「詩編」は第百五十編まであるが、龍之介がどの程度読み込んだかは判然としない。ただ八十四編六節の「涙の谷」の引用からして、かなりの部分を読んでいたことは確かである。

と指摘している²²。関口氏の入念な検証が証明するように、このころすでにかなり深く聖書を読み、彼の人生と芸術への試みに於いて、「聖書」の内容に対してかなり具体的に関心を持ち影響を受けていたことが推測できるのである。

四

初期のこのように窺えるキリスト教との関わりを肯定するなら、一方芥川が『西方の人』で、すでに引用したが次のように述べていることは注目されるところである。

わたしは彼是十年ばかり前に芸術的にキリスト教を——殊にカトリック教を愛してゐた。(略)それから又何年か前にはキリスト教の為に殉じたキリスト教徒たちに或興味を感じてゐた。殉教者の心理はわたしにはあらゆる狂信者の心理のやうに病的な興味を与へたのである。わたしはやつとこの頃になつて四人の伝記作者のわたしたちに伝へたキリストと云ふ人を愛し出した。キリストは今日のわたしには行路の人のやうに見ることは出来ない。(略)日本に生まれた「わたしのキリスト」は必しもガリラヤの湖を眺めてゐない。赤あかと実のつた柿の木の下に長崎の入江も見えてゐるのである。従つてわたしは歴史的事実や地理的事実を顧みないであらう。(略)わたしは唯わたしの感じた通りに「わたしのキリスト」を記すのである。厳しい日本のキリスト教徒も売文の徒の書いたキリストだけは恐らく大目に見てくれるであらう。

この「彼は十年ばかり前」である大正五、六年頃には、「芸術的にキリスト教を」愛した作品としては『煙草と悪魔』(大正五年)『尾形了齋覚え書き』(大正六年)などがあげられるが、次の「何年か前にはキリスト教の為に殉じたク

リスト教徒たちに或興味を感じてゐた」と書かれている時期に該当するものとしては『奉教人の死』（大正七年）『きりしとほる上人伝』『じゅりあの・吉助』（大正八年）、或いは殉死は描かれていないが切支丹物として注目される『南京の基督』（大正九年）などがあげられる。『西方の人』でこの時期を、キリスト教信仰ではなく「殉教者の心理はわたしにはあらゆる狂信者の心理のやうに病的な興味を与へた」と振り返っていると注目したいところである。

例えばこの時期を代表する『奉教人の死』であるが、まずこの作品のクライマックスの場面を引用する。

まことにその利那の尊い恐ろしさは、あたかも「どうす」の御声が、星の光も見えぬ遠い空から、伝はつて来るやうであつたと申す。されば「さんた・るちあ」の前に居並んだ奉教人衆は、風に吹かれる穂麦のやうに、誰からとも無く頭を垂れて、悉く「ろおれんぞ」のまはりに跪いた。その中で聞えるものは、唯、空をどよもして燃えしきる、万丈の焰の響きばかりでござる。いや、誰やらの啜り泣く声も聞えたが、それは傘張りの娘でござらうか。或は又自ら兄とも思ふた、あの「いるまん」の「しめおん」でござらうか。やがてその寂寞たるあたりをふるはせて、「ろおれんぞ」の上に高く手をかざしながら、伴天連の御経を誦せられる声が、おごそかに悲しく耳にはいった。して御経の声がやんだ時、「ろおれんぞ」と呼ばれた、この国のうら若い女は、まだ暗い夜のあなたに、「はらいそ」の「ぐろおりあ」を仰ぎ見て、安らかなほ、笑みを脣に止めたまゝ、静に息が絶えたのでござる。

ここで注目されるのは、作品に於いては、「ろおれんぞ」の最後の場面の「利那の感動」が、信仰に生命を捧げた人間の真実世界の美しさに対するものとして描かれており、「ろおれんぞ」の最後の「安らかなほ、笑み」が「はらいそ」の「ぐろおりあ」を仰ぎ見続けながらのものであることである。佐藤泰正氏は作品の主題に触れて、

作者は「聖者」を描きうるか、否「聖者」の生涯は描きえずとも、なお一片の無償の愛（アガペエ）の行為を、

主題として描きうるかというアポリエに直面して試みた、その手法にこそ芥川の独創があったと言える。

と述べ、この作品が芸術的な意図よりも「無償の愛の行為」に関心があつたことを指摘している⁽²⁴⁾。私はかつて本作品を、

「はらいそ」を仰ぎ見つつ安らかな微笑みを浮かべて死んだ「ろおれんぞ」の姿こそ、真実世界への飛翔に美化された人間の実在を見ようとしていた芥川が、一種の羨望をもってキリスト教世界に深く眼を注いでいた、その芥川の姿の象徴とも考えずにはいられないのである。⁽²⁵⁾

と論じたが、やはり天国を仰ぎ見つつ笑みを浮かべながら昇天していく「ろうれんぞ」に着目することで、作品が芥川の「殉教者の心理」に対する「狂信者の心理のやうに病的な興味」を抱いて書いたのではなく、かなりキリスト教への仰望を意識して書かれた作品であることが窺えるのである。そのことは『南京の基督』においてもいえよう。

『南京の基督』で注目される箇所は、宋金花が、一夜を共にした外国人男性が帰った後を描いた次の場面である。

「やっぱり夢ではなかったのだ。」

金花はこう眩きながら、さまざまにあの外国人の不可解な行く方を思ひやつた。

(略)

「それとも本当に帰つたのかしら。」

彼女は重い胸を抱きながら、毛布の上に脱ぎ捨てた、黒縹子の上衣をひっかけようとした。が、突然その手を止めると、彼女の顔には見る見る内に、生き生きした血の色が拡がり始めた。それはペンキ塗りの戸の向こうに、あの怪しい外国人の足音でも聞えた為であらうか。或は又枕や毛布にしてみた、酒臭い彼の移り香が、偶然恥ずかしい昨夜の記憶を喚びさました為であらうか。いや、金花はこの瞬間、彼女の体に起つた奇蹟が、一夜の中に跡方もなく、悪性を極めた楊梅瘡を癒した事に気づいたのであつた。

「ではあの人が基督様だったのだ。」

彼女は思はず襯衣の儘、転ぶやうに寝台を這ひ下りると、冷たい敷き石の上に跪いて、再生の主と言葉を交わした、美しいマグダラのマリアのやうに、熱心な祈禱を捧げ出した。……………⁽²⁶⁾

こうした金花の無邪気な祈りを指して三好行雄は、

金花はやがて、イエスに裏切られた *Odious truth* を、自己の肉体を明証として発見するはずであり、そのとき、病んでなおイエスの像を見る〈無邪気な希望の光〉は、確実に消えるだろう。無頼漢にイエスを見る〈信念〉が強ければ強いほど、彼女の内面に口をあける空洞は大きく、ふかい。〈信仰〉は〈幸福〉とともに瓦解するはずであった。⁽²⁷⁾

と指摘しているが、しかし五才の時から羅馬カトリック教を信仰し、健気な生き方をし、純朴な信仰を抱いて来た金花が、楊梅瘡が再発した時に三好が指摘するように簡単に〈信仰〉が「瓦解する」するとは思えにくく、むしろ私は、「金花のまだ見ぬ神への純粋な信仰と仰望」が簡単に瓦解するのではなく、むしろその中においても変わらずに明確な形で神の存在への仰望を見ることのほうが望ましいと判断できるのである。関口安義氏は、

「若い日本の旅行家」を客観的立場に立つ審問官に見立て、事の道理を十分読者に納得させながら、作者は理性を越えたところに存在する人間の幸せに、じつと目を注いでいるのである。(中略)

芥川はここに「理性の無力」を言う。その背後には宋金花をはじめ、れぷろぼすや吉助など、彼の造型した物語の主人公、芥川自ら言うところの〈神聖な愚人〉がいる。⁽²⁸⁾

と述べるように、金花像に『きりしとはろ上人伝』や『じゅりあの・吉助』とともに「神聖な愚人」像を見ている。芥川における「神聖な愚人像」とは、『煙草と悪魔』から始まって、芥川の切支丹物の中の登場人物達に指摘されてきているところであるが、関口氏の指摘のようにこの金花像に於いても、理性的ではなく愚直に自分のすべてを託し

て神に向き合い祈る姿にこそ、芥川がキリスト教を仰望する所以である、人間の救いや癒しの姿を見る事が出来るのである。そしてこのようなキリスト教に対する姿勢を確認し得るものとして次に大正十一年の『おぎん』が想起される。

そのように考えれば、「キリスト教の為に殉じたキリスト教徒たちに或興味を感じてゐた」この時期は芥川をさらにキリスト教へ引き寄せて行つた時期であるということもできるが、一方、その時期を、本来のキリスト教の神に対する関心・仰望とはしなかったところに、次の段階の「やつとこの頃になつて四人の伝記作者のわたしちに伝へたクリストと云ふ人を愛し出した」時期とは一線を画して、晩年の関心の対象がキリストそのものであり、宗教への救済の願望として位置づけられて認識されていたのではないということが推測されるのである。

五

そうした中で大正十（一九二一）年の中国旅行は芥川 of 思想と文芸において様々な影響を与えたが、キリスト教受容のあり方においても大きな変化を与えている。

中国旅行は大阪毎日新聞社の海外特派員として派遣されたもので、三月十九日に東京を発ち、四か月に及んで上海から北京までの各地を旅したものであった。旅行の具体的な内容には今回は触れないが、芥川にとつて初めての海外旅行であり、抗日、排日の動きが具体的になつてきている中で中国各地への旅はかなり彼の中国に対する認識や、日本の状況への認識に影響を与えたと考えられている。特に帝国主義政策を進めて行く日本への反省と、西洋に対しての日本をもっと明確に認識することの必要性を痛切に感じたことが想像できるのであるが、そのことと彼が長い間意識してきている日本におけるキリスト教受容の視点においても変化を指摘することが出来るのである。

そのことについてまず大正十一（一九二二）年一月に発表された『神神の微笑』に着目して見る。作品の最後の描写が特に印象的であるが次のように書かれている。

さやうなら。パアドレ・オルガンティノ！ 君は今君の仲間と、日本の海辺を歩きながら、金泥の霞に旗をあげた、大きい南蛮船を眺めてゐる。泥烏須が勝つか、大日靈貴が勝つか——それはまだ現在でも、容易に断定は出来ないかも知れない。が、やがては我々の事業が、断定を与ふべき問題である。君はその過去、海辺から、静かに我々を見てゐ給へ。たとひ君は同じ屏風の、犬を曳いた甲比丹や、日傘をさしかけた黒ん坊の子供と、忘却の眠に沈んでゐても、新たに水平へ現れた、我々の黒船の石火矢の音は、必ず古めかしい君等の夢を破る時があるに違ひない。それまでは、——さやうなら。パアドレ・オルガンティノ！ さやうなら。南蛮寺のウルガン伴天連！⁽²⁹⁾

注目したいのはここでオルガンティノを「君はその過去の海辺から、静かに我々を見てゐ給へ」と位置付け、「泥烏須が勝つか、大日靈貴が勝つか——それはまだ現在でも、容易に断定は出来ない」が、その勝敗よりも、そうした「古めかしい君等の夢」は必ず敗れる時があると確信を持って語っていることである。

芥川は大正十五（一九二六）年に発表した「ある鞭」の中に次のように記している。

僕は年少の時、硝子画の窓や振り香炉やコンタスの為に基督教を愛した。その後僕の心を捉へたものは聖人や福者の伝記だつた。僕は彼等の捨命の事蹟に心理的或は戯曲的興味を感じ。その為に又基督教を愛した。即ち僕は基督教を愛しながら、基督教的信仰には徹頭徹尾冷淡だつた。しかしそれはまだ好かつた。僕は千九百二十二年、基督教的信仰或は基督教徒を嘲る為に屢短編やアフォリズムを舐した。しかもそれらの短編はやはりいつも基督教の芸術的莊嚴を道具にしてゐた。即ち僕は基督教を軽んずる為に反つて基督教を愛したのだつた。僕の罰を受けたのは必ずしもその為ばかりではあるまい。けれども僕はその為にも受けたことを信じてゐる。

(一) ある鞭⁽³⁰⁾

ここで注目したいのは「僕は千九百二十二年来 基督教的信仰或は基督教徒を嘲る為に屢短編やアフォリズムを舐した」と書きとめている箇所である。芥川がここで「千九百二十二年来」と限定したことは、『西方の人』で「わたしは彼は十年ばかり前に芸術的にキリスト教を」「それから又何年か前にはキリスト教の為に殉じたキリスト教徒たちに或興味を感じてゐた」というような形で自己のキリスト教への関心の有り方に対する時間の変化を語った示し方とはまた別のスタンスで示そうとする意図を含んでいることを推測することが出来る。そしてその「千九百二十二年」という年が、芥川においてみるならばそれが中国旅行を終えた翌年のことであることを考え合わせると、芥川が中国旅行を経験した後、帝国主義政策を進める日本の現状を批判的に見、日本と西洋の關係に対しても厳しい眼差しを向けているその時期の認識が、彼が長年意識してきた日本における、そして芥川自身におけるキリスト教に対する認識のありように対しても密接に影響していることが推測できるのである。即ち、帰国後の「千九百二十二年」からは「基督教的信仰或は基督教徒」に対して「嘲る為」とあるようにかなり批判的に見るようになった、そしてそのことが、「僕は基督教を軽んずる為に反つて基督教を愛したのだつた」というように、そのことがむしろ一層キリスト教へ接近させることになったのだと述べている点に注目しなければならないと考える事が出来る。このようにキリスト教への厳しい対峙を一九二二年を区切りの年としてしていることと、『神神の微笑』でオルガンティノに対して「君はその過去の海辺から、静かに我々を見ていたまえ」というように、これまでの少なくとも日本と西洋の宗教に対する精神風土の違いをそれは取り去ることができないものとして容認して、その上に立つて「作り変える力」の方に置き換えて行く捉え方をしてきたことは明確に一線画して、その懸隔に対して峻厳に対峙していこうとした姿勢と、その『神神の微笑』で、「新たに水平へ現れた、我々の黒船の石火矢の音は、必ず古めかしい君らの夢を破る時があるに違いない」としたことは、通じるであろうが、その姿勢が、大正十五（一九二六）年の「ある鞭」では「僕は基督

教を軽んずる為に反つて基督教を愛したのだつた」というように、キリスト教に対してより接近させることになつたのだという認識が『菌車』を経て、最後の『西方の人』正統において凝集されていったというように考える事が出来るのである。

大正十一年九月に發表された『おぎん』、翌年四月發表の『おしの』は、それぞれ、キリスト教と日本の精神風土との対峙、日本の武士道と西洋のカトリック信仰との対峙をテーマとしており、両者の間をふさぐ「土着化」の視点で問いかけて来た芥川のキリスト教への対峙の仕方が、大正十一年以後、より峻厳さを加えて行つてゐることが推測できる。そうした過程を踏まえうえで最後の作品『西方の人』の「この頃になつて四人の伝記作者のわたしたちに伝へたクリストと云ふ人を愛し出した」、「クリストは今日のわたしには行路の人のやうに見ることは出来ない」という言葉に触れると、そこには中国旅行をきっかけとして、それ以後の芥川がより切実な意識をもってキリスト教と対峙し真剣に問い続けてきた足跡が浮かび上がつてくるということが出来よう。

先に引用した箇所であるが、芥川は『菌車』『五 赤光』の、屋根裏の老人との問答の場面で、

「若し僕でもなれるものなら……」

「何もむづかしいことはないのです。唯神を信じ、神の子の基督を信じ、基督の行つた奇蹟を信じさへすれば……」

「悪魔を信じることはできませんがね。……」

「ではなぜ神を信じないのです？ 若し影を信じるならば、光も信じずにはゐられないでせう？」

「しかし光のない暗もあるでせう」

「光のない暗とは？」

僕は黙るよりはかはなかつた。

と記しているように、最後まで神を信じる事が出来ず「光のない暗」をさまよい続けたかもしれない。しかし、『歯車』の中で「神よ、我を罰し給へ。怒り給ふこと勿れ。恐らく我滅びん。」と書きとめたように、明確に「罪」を自覚し、キリストと二対一で向き合って行こうとしていることにこそ、青春時代から問い続けてきたキリスト教の神に対して、仰望と信仰の求めにおいて最も近いところで最も峻厳に問いかけている姿を読み取ることが必要でないかと結論付ける事が出来るのである。

註

- (1) 『続西方の人』『芥川龍之介全集』第十五卷（岩波書店、『全集』は一九九六年より発行）、二七四頁。
- (2) 『続西方の人』『芥川龍之介全集』第十五卷、二八八頁。
- (3) 『或旧友へ送る手記』『芥川全集』第十六卷、四頁。
- (4) 小穴隆一『二つの絵 芥川龍之介の回想』昭和三十一年（一九五六）年一月三十日、中央公論社、二〇—二二頁。
- (5) 『歯車』『芥川龍之介全集』第十五卷、七一—七二頁。
- (6) 『西方の人』『芥川龍之介全集』第十五卷、二六五頁。
- (7) 佐古純一郎『芥川龍之介とキリスト教』（『近代文学鑑賞講座』第十一卷芥川龍之介 角川書店 一九五八年六月）二七六頁。
- (8) 佐藤泰正『芥川龍之介論「歯車」論、（『佐藤泰正著作集』4、翰林書房、二〇〇〇年九月二十日、一一—三頁）
- (9) 森有正『近代精神とキリスト教』河出書房、昭和二十三（一九四八）年、昭和四十五年に講談社より増補改訂版発行、引用は増補改訂版、一二四頁。
- (10) 『西方の人』『芥川龍之介全集』第十五卷、二四六頁。
- (11) 『老狂人』『芥川龍之介全集』第二十三卷、二一〇頁。
- (12) 細川正義『初期キリスト教もの——芥川文芸の〈命根〉をとらえたキリスト教——』（宮坂覺編『芥川龍之介と切支丹物——多声・交差・越境』翰林書房 二〇一四年四月）一四八頁。

- (13) 関口安義『芥川龍之介 永遠の求道者』洋々社、二〇〇五年五月、五九頁。
- (14) 「暁」『芥川龍之介全集』第二十三卷、四頁。
- (15) 「PIETA」『芥川龍之介全集』第二十二卷、四四五頁。
- (16) 「点鬼簿」『芥川龍之介全集』第十三卷、二三四—二三五頁。
- (17) 東郷克美『芥川龍之介の「寂寞」』『国文学研究』第六八集 一九七九年六月
- (18) 「温き心」(「日光小品」) 明治四十四(一九一二年)頃の作、『芥川龍之介全集』第二十一卷、一三三頁。
- (19) 山本喜譽司宛書簡(大正四(一九一五年)四月二十三日)『芥川龍之介全集』第十七卷、二五九頁。
- (20) 井川(恒藤)恭宛の書簡(大正四(一九一五年)三月九日)『芥川龍之介全集』第十七卷、二五二頁。
- (21) 藤岡蔵六宛書簡(大正四(一九一五年)三月九日)『芥川龍之介全集』第十七卷、二五三頁。
- (22) 関口安義「この人をみよ 芥川龍之介と聖書」小沢書店 一九九五年七月、四九頁。
- (23) 『奉教人の死』『芥川龍之介全集』第三卷、二六二頁。
- (24) 佐藤泰正『奉教人の死』と『おぎん』—切支丹物に関する一考察—(『国文学研究』第五号、昭和四十四(一九六九)年十月、のち『佐藤泰正著作集④』(翰林書房、二〇〇〇年九月、所収、四一頁)。
- (25) 細川正義「奉教人の死」の世界」『日本文芸学』第九号、一九七四年十月。
- (26) 『南京の基督』『芥川龍之介全集』第六卷、二五一—二五三頁。
- (27) 三好行雄『芥川龍之介論』「地底に潜むもの」、筑摩書房、一七九頁。
- (28) 関口安義『芥川龍之介とその時代』筑摩書房 一九九九年三月二十日、三九三頁。
- (29) 『神神の微笑』『芥川龍之介全集』第六卷、二〇三頁。
- (30) 「ある鞭」『ある鞭、その他(仮)』(大正十五(一九二六)年頃の作)『芥川龍之介全集』第二十三卷、二二二頁。

本稿は二〇一四年七月五日、阪神近代文学会 第四十七回大会(於 関西学院大学)にて講演したものをもとに、大幅に加筆修正して成したものである。